はじめに

- 本セミナーの目的

2022年に国連障害者権利委員会から発出された日本への総括所見に記載された、日本の医療・介護・福祉の制度やその従事者への厳しい批判と改善要求がありました。このセミナーでは様々な指摘の中の核心である「パターナリズム」を取り上げ、その事例として「障害者はかわいそう」という誰もが感じる可能性のある言葉からパターナリズムを紐解いてゆきたいと考えています。

そして、このパターナリズムがいかに差別的であるかを知ると共に、私たちが日々の仕事や暮らしの中でパターナリズムに侵されているのか？私たちの体の中に染み込んでいるのか考えてゆきます。そして、セミナーの後半では、パターナリズムを乗り越えることが可能なのか？可能であればどんな方法があるのか？皆さんと共に検討してゆきます。

- 注意点

★本セミナーの内容のすべての著作権は「インクルージョンジャパン」が保有しています。

★本セミナーで使用している画像は特に出典を明記する場合を除き、画像生成AIによって制作されたものです。特定の個人や団体、また特定の障害を表すものではありません。

★動画の録画録音は禁止です。

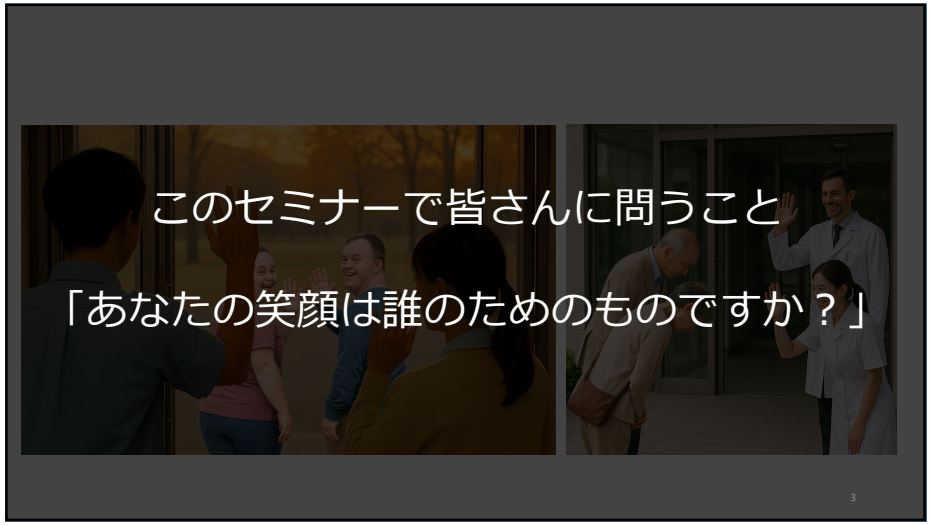
★配布資料の第3者への提供及び引用は禁止です。（院内、施設内研修で資料を活用希望の場合は、当方まで個別に相談してください）

★動画の配信URLの第３者への提供、及び申込者以外の第３者との共同視聴は禁止です。同じ画面で複数人が視聴する場合は、一人一人が個別に申し込む必要があります。

★質問は配信ページの質問フォームより承ります。

★本セミナーは日本身障運転者支援機構の発行する各種認定取得の対象外です。

医療機関　治療+**支援**
介護・福祉事業者　**支援**
特別支援学校　教育+**支援**



支援とは結果ではなくプロセス

支援する者の最大の喜びとは、利用者や患者が笑顔で去ってゆくこと。
この経験は、現場にいる「中の人」にしか味わうことができない、相手からのプレゼント

患者・利用者の笑顔は本物か？

私たちが感じる喜びは帰結主義に陥りやすい（結果がすべて） → 支援とは結果ではなくプロセス → 結果を求めない

今のままを受け入れる

私たちの喜びは誰のためのもの？

それは自分のため。自己肯定感。良いことをした自分。

他者の道具化
患者視点の置き去り

- 障害者の意思決定を支援するプロセス
- 本人のペースを尊重する関わり
- 成功や達成を目的としない支援
- たとえ結果が芳しくなくても、尊厳を守る関わり

失敗する権利

私たちは、私が喜びを感じた時、あなたのその笑顔は誰のものなのか？問い続ける必要があります。
相手の幸せに対する喜び？それとも自分に対する喜び？（帰結主義は相手の本意を汲み取れない）

・「自分が喜ぶこの瞬間、相手の心の内側にまで思いを巡らせているか？」
・「私はこの笑顔を、何かの“成果”として受け取ってしまっていないか？」
こうした問いを持つことで、喜びは**他者との共鳴**になり、
支援は**自己満足ではなく、関係性の中で生まれる意味の共有**へと変わる。

パターナリズムとは？善意が引き起こす悲劇。

- パターナリズムとは？

強い立場にある者が弱い立場にある者の利益のためだとして、本人の意思は問わずに介入、干渉、支援すること。

父親が家族に対して、家族の利益だと決めて指示したり強要したり、干渉する。（父権主義）wikipedia

＊父権主義と言われるが女性も同様の役割を担う（母性）

- 現代における事例
「あなたのために・・・」
「あなたを思って・・・」
「あなたはまだ子供だから・・・」
「あなたは分かっていない・・・」
「親の言うことは聞かなければならない」
「他人に迷惑をかけるな」
「友達みたいな親子」
「孤独から目をそらすためのスマホ」

人間関係の基盤は親子関係にあり、
それが社会における人間関係にも影響する

無意識に、他者に対して同様の態度をとる。

他者の道具化

自己決定権の侵害・子の奴隷化（支配）
自由意志の抑圧
相手を依存させる

親は善意によってこのように言う

「パターナリズムは善意から生まれる他者の道具化」
～私の善意は正しい～

「放っておけというのか？」「自覚しにくい」「逆切れ」

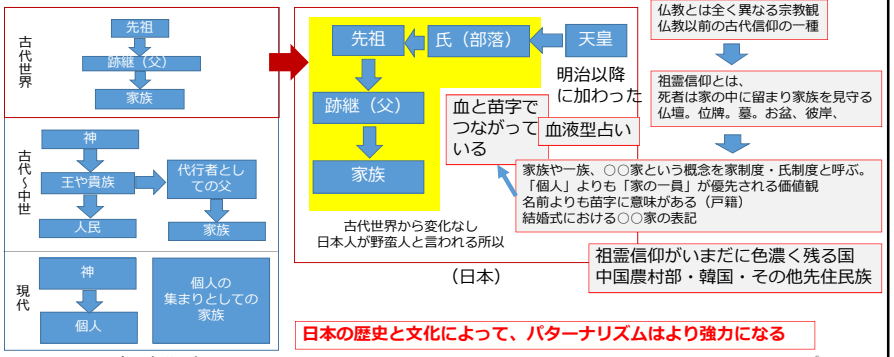
「見守る」「支援」の意味を誤解

パターナリズムとは？文化的に遺伝する父権主義　氏・家制度・祖霊信仰

- 日本的パターナリズムの構造

パターナリズムは、人間が本来的に持っている感情や本能ですが、意味や力、その範囲は地域の歴史や文化宗教観に依存します。

日本においては、祖霊信仰・氏・家制度などの影響を受け、他者との関係におけるパターナリズムはより強固、強力に作用します。



日本の歴史と文化によって、パターナリズムはより強力になる

パターナリズムとは？文化的に遺伝する父権主義　氏・家制度・祖霊信仰

生き残る祖霊信仰と家制度

- いずれの作品も、祖霊信仰や自然崇拝、氏、家制度が作品の背景となっている。
- 特にジブリ映画は、これらの伝統を肯定するのではなく、それを乗り越えようとする女性が主人公となっていることが多い。

パターナリズムとは？文化的に遺伝する父権主義　氏・家制度・祖霊信仰

なぜ外国人はここに押し寄せたのか？

富士山には神が宿るという古代の祖霊信仰と自然崇拝の聖地、そして最先端の物流網と商品群を取り扱うコンビニの対比。これこそが日本を外側から見る外国人にとっての日本という国の象徴。このような国はこの世界に一つしかありません。
外国人にとって、この場所はリアルジブリに見えるのです。

祖霊信仰や家制度にまつわる
現代の社会問題

- 女系天皇
- 夫婦別姓
- ジェンダー
- 女性差別
- 移民・難民
- 戸籍

読売新聞オンライン

パターナリズムとは？文化的に遺伝する父権主義　氏・家制度・祖霊信仰

なぜ、祖霊信仰や家制度が問題なのか？「個人」よりも「集団（家）の一員」が優先される

- 祖霊信仰や家制度が悪であるとは言えません。それは独自の文化を形成し現在に至る歴史なのですから。しかし、現代における人権や福祉、医療という分野とは相性が良くない。私たちはこの相違を消すのではなく折り合いをつけねばなりません。それは西洋社会がかつてそうだったように。
- 人権も福祉も、西洋思想（一神教的）であること。従って日本人にはしっくりこない。
- 人権も福祉も医療も輸入品である。いずれも明治以降に輸入された概念であった。それまでは人権も福祉も医療も日本にはなく、家族、親族、血族がその役割を担っていた。

個人の尊厳よりも一族や家族、○○家の面目・権威維持が優先された。その目的を達成するためのパターナリズム。それは現代にも引き継がれています。

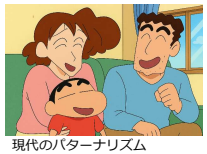
○障害者や高齢者は家族が面倒みるべきだ（家制度）
○罰が当たる（因果応報・仏教思想）
○子育てに問題があった（家や親の責任）
○他人に迷惑をかけるな（家系に傷がつく）
○先祖が近くにいて家を守ってくれる（仏壇、位牌、墓参り）
○結婚における家同士の縁（結婚は個人的なものではない）
○空気を読む（個人より集団の一員）
○異質なものを排除する（輪を乱す、純血や恥）
○うちはうち、よそはよそ（祖霊信仰・家ごとに異なる神がいる）

医療福祉への影響
- 本人の意思決定よりも家族の意向を重視する（祖霊信仰・家制度）
- 同意書への家族の署名（祖霊信仰・家制度）
- 代理の意思決定の責任回避（代理に意思決定する場合の責任不在）
- 患者、利用者よりも、施設の円滑な運営や生産性、権威の維持を重視する（個人より集団）
- 日本的善意（往々にして、悪に変質する）
- 帰結主義的支援（結果が出ること、また結果を出すことに重点が置かれる。因果応報）
- 能力主義的組織（学歴や給与、役職などのヒエラルキーを重視。結果として患者や利用者をもそのような視点で評価してしまう）

パターナリズムとは？新しいパターナリズム。「文化的遺伝」

昭和的パターナリズム　祖霊信仰や家制度が露骨に表現される親子関係

パターナリズムとは？新しいパターナリズム。「現代の子育て。友達のような親子」



現代のパターナリズム
（友人同士のような親子）

結論
私の子供は私のものである
↓
私と子供は別人である

- **親の「孤独」と「承認欲求」「あなたがいないと私が壊れてしまう」**

育児への不安・育児の孤立化・孤独 → 「孤独な私」を認めたくない → 子どもに"友達"を求めてしまう
子どもを支えるはずの親が、逆に子どもから「癒し」や「共感」を得ようとする
↓ 善意による「道具化」

親）子に対して自分の寂しさや孤独を理解して欲しいと願う
子）無意識に親を喜ばせる存在になろうとする自分の感情を後回しにし、親の顔色を読むようになる（忖度）
子）親が不機嫌だと自分のせいだと考える
↓
早すぎる成熟・感情の抑制**（親化された子供）**

親）境界の曖昧さ（友達と言っていいながらも実際には選択を親が誘導。）
子）自分で選んだようで実は選んでいない。（子の不安）
子）親の意思に沿わなければいけない、と言う強迫性
子）表面的な仲良し。拒絶亜犯行が難しい（反抗期の消失）
↓
逃げ場のない関係　抑うつ、不登校、自己否定、過剰な自己責任

- **「友達のように」という言葉が、じつは"支配を見えにくくする**

本当にフラットな関係ならば、子どもは親に「NO」と言えるはずですが、「友達のような親子」という形の中で、親の期待を読み取って忖度する子どもも増えています。つまり、旧来のパターナリズムとは別のかたちで、同調や服従が温存されている可能性もあるのです。

- 子どもは罪悪感と自立の狭間で引き裂かれる
- 親は自分の依存を「愛」とすり替え、関係を取り戻そうとする
- 結果として「共倒れ」あるいは「断絶」が生じる

自分の「孤独」を正直に認める自覚が親に求められている

小まとめ　あなたの生き方は自ら選んだものですか？自立と自律

日本的パターナリズム

・祖先という見えない指導者が無意識の中で生き続ける（空気）
・祖霊信仰・氏・家制度がパターナリズムの意味を変える
・父親と言う最終決定者は、実は本人の意思において決定してはいない。

↓

伝承・伝統・家の慣習・家の名誉（他人の目）　**過去の代理人**

↓

責任の所在が不明

↓

日本的パターナリズムを無自覚に生きることは、生きることそのものを過去に依存させ、責任を不明確にする。
選択の責任が自分に帰ってこない
間違えたとき、「自分のせいじゃない」と言える構造が生まれる

↓

「和を保つ」という目的のもとで機能する代理的秩序装置です。

「かわいそう」と感じた経験はありませんか？

私たちは他者に対して「この人はかわいそうだ」と感じることがあるのではないでしょうか？
このように感じる時、私たちの心の中には以下のような想いが浮かぶと思います。

- 相手の苦しさや辛さへの共感。
- 助けてあげたい。守ってあげたいという感情。

人間が他者に対して「かわいそうだ」と感じること自体は、自然なことです。自然なことであるどころか、それは人間として素晴らしいことなのだ。と考えることもできるでしょう。

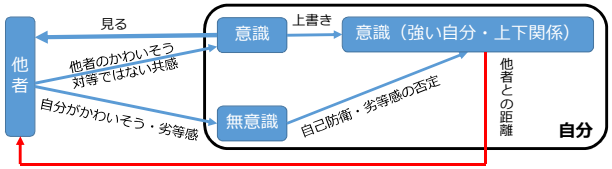
しかし、「かわいそう」という感情は、人間本来の習性である共に、その意味は、時代、文化などの影響を受けて変わってしまう。では現代社会という文脈において、
「かわいそう」はどのような構造を持ち、そのような構造からどんな意味が現れるのか？
かわいそうと言う感情が何を表すのか？それを考えるのに一番良い方法は、自分がかわいそうだと言われたときにどう思うか考えてみることです。

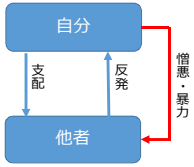
また、「かわいそう」という感情が心に浮かんだ時、私たち人間の心に何が起こるのか？特に他者を評価するような言葉は、私たちの心の中でとても複雑な作用を起こすのです。

「大変だったね」「つらかったね」「しんどいよね「心が痛む」「胸が締めつけられる」「何かできることないかな」これらの言葉はかわいそうの代替として使われるが、いずれもかわいそうと同様の作用を持つ。

14

かわいそうの構造　他者とは自分が映る鏡　ラカンの鏡像段階、鏡像性





守ってあげたい。教えてあげたい。上から目線での押し付け（**善意**という子ども扱い）

日本的パターナリズム（実は自分を守っている）

- 他者を「かわいそう」と感じるのは、自分の内面に潜む「かわいそうな自分」と共鳴するから。（鏡像性・ミラー構造）
- 他者をかわいそうと感じる時、自分はかわいそうではない側にいるという前提。（共感と言うよりヒエラルキー）
- 他者を鏡として自己の不完全さを投影・補完（ラカンの鏡像段階）（鏡像性）精神分析、臨床哲学
- 本人は「善意」であると確信している。（無自覚）
- 上から目線は言葉だけでなく、行動や表情、仕草などの非言語にも無意識に現れる。
- 他者と自分の距離が重要。（距離が近いほど構造が強化される）
- この種の善意は一瞬で憎悪に変わる。（私の善意を無にされた・してあげているのに。）

15

事例。「かわいそう」は一瞬で憎悪に変わる

- 福祉作業所の支援員６０代男性の事例

2025年3月、わたしより一か月早く就職。派遣社員。

2025年4月、勤務初日の帰宅時に、「障害者はかわいそうだ」と言った。その後も頻繁に言う。

作業所内では利用者を笑わせるなど人気があるが、私には、それが面白い父親に見えた

2025年5月、勤務開始一か月後、女性利用者から反発され激怒
「ふざけんなこの野郎」と暴言を吐き片手を上げた

笑わせることによって支配する

他の職員はみていなかった

その後、この女性利用者との同様のトラブルが数度発生

この頃から、複数の利用者から、男性支援者が怖い。嫌い。と私に言うようになった。

2025年6月、男性支援者から、あの女のことは無視することにしたと聞いた。
また、あいつらは頭がおかしいとも言う。

ある利用者が、男性支援者が嫌いだ、同じ送迎車に乗りたくないと言い、作業所内で暴れる

数日後、帰宅時に利用者が男性支援者に突進してぶつかった。
再び「ふざけんなこの野郎と言って拳を上げた。この出来事についてある女性支援者は「両者に責任があると述べた」

「施設の秩序と、職員と利用者の固定された上下関係の維持」

翌日、当事者同士が作業所内で面会。面会中に利用者が部屋から飛び出してきた
現場責任者から意見を求められ「解雇妥当」と進言。

関係修復を早急に図る必要があるとの考え。

二日後、最初の女性利用者から反発され、再び暴言を吐く。

自覚なし

この一連の出来事は作業所内で不問とされ、現在も働いている。
基本的に配下の利用者とのみ交流。トラブルや異変が起きるとその場から逃げる。

私が感じたこと

- 何よりも利用者が傷ついた。
- かわいそうに潜む上下関係、上から目線。「してあげている。それはお前のため。それが私の善意なのだ」
- かわいそうという「共感」は一瞬にして憎悪に変わる。「自分の善意を裏切った」「馬鹿にされた」
- 言葉にしなくてもパターナリズムは行動、仕草、顔色、視線などで敏感な利用者に伝わってしまう。
- これほど極端で明快なパターナリズムは、異常な「共感」から生まれる。「異常な共感」とは、自身と相手の距離が異様に近くなること。近くなればなるほど、自身と相手が一体化し、共感が暴走するからである。この支援者には「障害のある子供がいたのではないか？」そしてその子供を捨てた過去があるのでは？（現在独身）

暴力についての私の仮説
この支援者は境界知能？

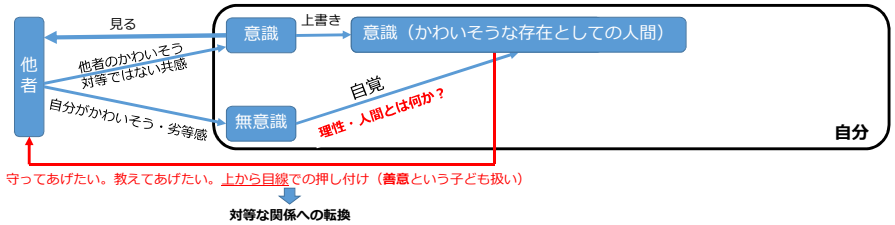
私は現在、この支援者を同僚とはみておらず、もう１人の利用者として接しています。

この事業所の未来

- 心ある新人が去ってゆく
- 同化する職員が増える。
- 問題が多発
- 倒産、または行政指導
- 結果として傷つき、居場所を失う利用者

16

「かわいそう」を乗り越える



- 誰がかわいそうなのか？→それは相手であり自分自身でもある。（ミラー構造）
- なぜ自分も相手もかわいそうなのか？それは、自分がかわいそうだと感じた過去があるから。
- かわいそうなのは人間自体。私もあなたも、あの人もこの人も、２１世紀という時代を、懸命に生き、悲しみに暮れる時もあれば、一瞬の喜びを経験する時もある。時に人をだまし、また人に騙され、だました人もまた誰かに騙されている。どんなに頑張っても、命が終わる時が来てこの世界に別れを告げなければならい。良いことをしていると感じながら他者を傷つけ、また同様に傷つけれたと感じる。強い人もいれば弱い人もいる。人気者もいれば地味な人もいる。人間とは不完全で不器用で、意図せずに人を傷つけ、道半ばで死んでゆく存在。

小まとめ

- 「かわいそう」とは、無意識に他者を道具化し、自己を防衛する感情・本能
- 「かわいそう」とは善意から生まれる差別と支配。支援ではなく教育。そして憎悪
- 「かわいそう」に秘められた無意識の世界と日本人の歴史、宗教・文化
- 人間自体に内包する「かわいそう」そして、そうであるからこその「尊厳」と「人権」
- 人間は時に大切なことを忘れてしまう。問いかけ続けることの大切さ

他者を道具化するあらゆる試みは差別です

障害者差別解消法と医療機関　厚労省ガイドラインの解説

- 2024年、厚生労働省は障害者差別解消法改正における合理的配慮の義務化を受け、医療機関及び福祉関連事業向けにガイドラインを作成しました。

世界人権宣言
↓
障害者権利条約
↓
日本国憲法
↓
障害者総合支援法
障害者差別解消法
バリアフリー法
↓
医療機関
福祉事業

◆医療機関（病院・診療所・助産所・調剤を実施する薬局）

- 正当な理由なく、保護者や支援者・介助者の同伴を診察や・治療・調剤の条件とすること
- 正当な理由なく、保護者や支援者・介助者の同伴を拒否すること
- **正当な理由なく、本人（本人の意思を確認することができない場合は家族等）の意思に反した医療の提供。または意思に沿った治療の提供を行わないこと**
- **大人の患者に対して、赤ちゃん言葉で接すること。**
- パニック等を起こした際に静かに休憩できる場所を設けること
- **声がよく聞こえるように、また、口の動きや表情をよめるようにマスクを外すこと**
- 白衣に強く反応し、診察を拒否するという場合には、必要に応じて通常の服に着替えて対応する
- **人権、障害者差別、共生社会等についての研修を従事者が受けること。**
- 内部規則やマニュアルなどを点検し、障害者へのサービスについて制度に適合していることを確認。不足があれば改定する

◆医療機関のパターナリズム

1. **治療と支援の境界**（治療と支援は半ば重なり合っている）
2. **インフォームドコンセント・同意書への家族署名**（法的契約より良き医療行為を行うためのパートナーシップ）
3. **代理決定**（家族とは誰のことか）
4. **上から目線**（治療者Vs患者＝強者Vs弱者）もし、患者が治療を拒否したら？
5. **出来ることは素晴らしいと考える**（能力主義的思想）

障害者差別解消法と福祉事業者　厚労省ガイドラインの解説

- 福祉事業者（生活保護関係事業・母子福祉関係事業・高齢者福祉関係事業・障害福祉関係事業・＊隣保事業・福祉サービス利用援助事業など）*医療保険制度における訪問看護事業等は「医療」の扱いとなる

＊隣保事業とは、地域の中に定住し、地域や住民の隣人となり、人々の生活困難、物質的・精神的救済を行う事業。貧困や差別、教育や環境等がテーマになる。

- サービスの利用を拒否すること
  - サービス提供の場面における障害者本人や第三者の安全性などについて、具体的に考慮することなく漠然とした安全上の問題を理由として、施設利用を拒否すること。人的体制、設備体制が整っており、対応可能であるにもかかわらず、医療的ケアの必要な障害者、重度の障害者、多動の障害者の福祉サービスの利用を拒否すること。
- サービスの利用を制限すること
  - 正当な理由なく、他の者とは別室での対応を行うなど、サービスの提供場所を限定すること。

  保護者や支援者の同伴をサービスの利用条件とすること
  サービスの利用にあたって、他の利用者と異なる手順を課すこと（仮利用期間を設ける。他の利用者の同意を求めるなど）
- サービスの提供・提供に当たって、他の者とは異なる扱いをすること
  - 正当な理由なく、行事、娯楽等への参加を制限すること
  - 正当な理由なく、年齢相応のクラスに所属させないこと
  - 本人を無視して、支援者・介助者・付添者のみに話しかけること
  - **障害者本人の尊厳を軽視して、見下したような言葉遣いや幼児を相手にするような言葉で接すること。（ニックネーム・ちゃん付を含む）**
  - 正当な理由なく、本人の意思又はその家族等の意思（障害のある方の意思が確認することが困難な場合に限る）に反して、福祉サービス（施設への入所、通所、その他サービスなど）を行うこと
- 職員などとのコミュニケーションや情報のやり取り、サービスの提供についての配慮や工夫
  - **口話が読めるようマスクを外して話をすること（聴覚障害を対象としているが知的障害なども対象）**

支援とは何か？　支援はいとも簡単に「教育」へ転換する　あなたには他人を教育する資格がありますか？

支援
- 与える
- 教える
- 指導・改善
- 矯正

→ 教育・教師

支援とは、与えることでも教えることでもありません。支援とは、他者の声なき声に耳を澄まし、それを受け止め、共に苦しむことを指します。これをコンパッション（共苦）と言い、福祉の大原則です。相手を変えるのではなく対話を通じて自分を変えるのです

- 「支援」と「教育」の境界で起こる悲劇

1. 教える側と教えられる側という上下関係（上から目線・あなたは何も知らない。出来ない）
2. 支援者の不安やあせりが変質の原因（何かしなければならない。何をしたらいいのか？）
3. 教育のゴールが支援者の主観（世間体、個人よりも集団、「出来るようになる」に秘められた「現在」の否定）
4. 帰結主義的（ゴールから逆算する。自分の仕事にも相手にも結果を求める）
5. 自己認識不足（あなたは知らないが私は知っている。あなたはいったい何を知っているというのですか？）

- 帰結主義的支援

「この人も自立した生活を送れるようになるべきだ」
「働くことで社会に貢献できるようになってほしい」
「コミュニケーション能力が向上すれば就労の可能性が広がる

善意から生まれる（良かれと思ってやったことが）
帰結主義的支援は、本人の現在の姿を否定しています
支援者ではなく教師

観点	教育	支援
目的	変化や成長を促す	現在のままの存在を認める
基本姿勢	指導・導く	寄り添い・尊重する
ゴール	目標の達成。 ある型への到達。相手を変える	自律的な在り方 存在の肯定自分を変える

支援とは何か？　支援はいとも簡単に「教育」へ転換する　あなたには他人を教育する資格がありますか？

事例）２９歳女性（知的障害）前触れなく他者を叩く。殴る。

教育（良かれと考える）

- してはいけない悪いことだ **常識に合わせる支援者の主観**
- **相手を変える**
- そもそも29歳の大人の女性に教育しますか？

支援（共に苦しむ）

- なぜ人を叩いたりするのだろう？何か理由があるはずだ　**あなたのことが知りたい**
- 叩くのは特定の人のみ。私をもっと見てほしい。関心を寄せてほしい？好意の裏返し？　**声なき声を聴く**
- 手をつないで散歩。その時に感じたこと　**沈黙の力**
- もっと積極的に話しかけてみよう 朝の挨拶・世間話　**自分が変わる**

「劣った存在」vs「一人の尊厳ある人間」

余談
病院や施設における患者や利用者のよりどころは、実は支援者ではなく、患者同士、利用者同士ではないか？
そうであるならば、これは支援者に対して重大な問題を問いかけています。

利用者と支援者、そして組織がつながる（ガバナンスとしての祝祭）

事例）ヘタクソなダンスと上下関係の転倒　そして祝祭

- ヘタクソなダンスを披露する
- ダンス好きな利用者を先生と呼び教えを乞う
- それでもへたくそな私
- 笑いと批判

→

利用者の人生とはどんなものだったのでしょうか？
いつでも上から目線で語られ、自分の言いたいことをうまく言えず常に教えられ、指導され、矯正の対象とみなされる。
このような人生には耐えられないけれど、それを表現することが苦手。
時にそれは暴力となり、悲しみとなり、沈黙を呼ぶ。
私は思う。そんな人生をたまには逆転させてもいいのではないか？
多分彼ら彼女らは、生まれて初めて他者を上から見下ろす経験をしただろう。
そこには上下関係を超えた「自分の尊厳」という無意識の自覚と、
自分が「ここにいる」「いていいのだ」という実感を呼び起こすに違いない。

支援とは何か？　支援はいとも簡単に「教育」へ転換する　支援と教育（知的障害の事例）

音に敏感で、他人の咳こむ音に激怒する。時に暴力的になる。日常的に遮音ヘッドフォンを使用している。他者の手を頻繁に握る

ある時、本人が風邪をひいて自ら咳き込んだ

教育

自分も咳をするのだから、他人の咳も寛容に受け止めるよう指導した

本人は、そんなことは言われなくてもわかっている。それでもどうにもならないことに苦しんでいるのだ

教育者でない者が行う教育
○自分が判断基準（自分が正しい）
○周囲に合わせる（空気を読め）
○上下関係を満たす（秩序の維持）
○やってる感（自己満足）

怒りや暴力は、相手だけでなく本人も傷つける

支援

咳をしてるけど喉が痛いですか？のどが痛いのは辛いよねえ。早く治るといいね、と声をかけた。

事実と苦しさの共有。声をどう受け取るかは本人次第。

- なぜ自分の咳には反応しないのに他人の咳には反応するのか？　「待つ」という支援
- 単に音に反応しているのではなく、怒りは何らかのメッセージではないのか？相手に何か言いたいのではないか？　声なき声を聴く
- 遮音ヘッドフォンの使用には細心の注意が必要なことを知る　あなたのことが知りたい
- ヘッドフォンの副作用で、他者とのコミュニケーションの発達が阻害されているからではないか？
- 確かにヘッドフォンをしたこの利用者に、話しかける人はこの施設にはいない。また、本人から話しかけられることはあるが、いつも特定の内容に限られている。それも何度も同じことを尋ねる。

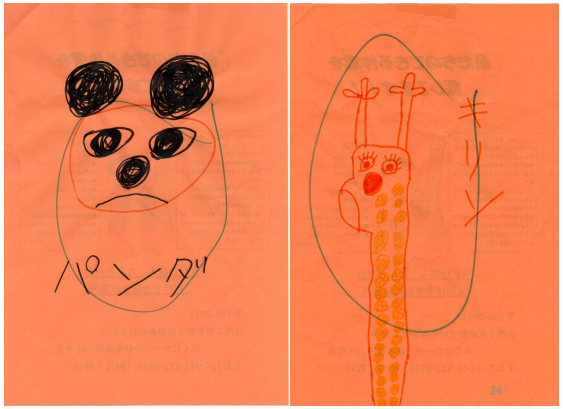
「支援」とはプロセスであり長い道のりが必要

自分が変わる　相手を知る

彼女の声なき声を私は受け止めたい。私に何を訴えているのか？まずは、明日から毎日、話しかけるところから始めてみよう。

支援とは何か？　沈黙の力

無言で渡された2枚の絵



支援とは何か？　まとめ１

私たちは成功するためにここにいるのではありません。
誠実であるためにここにいるのです。
マザーテレサ　1910~1997 1979年ノーベル平和賞受賞

支援とは「結果」ではなく「プロセス」
支援とは「教える」ことではなく「共にいること」
支援とは相手を変えることではなく「自分を変えること」
他者とは自分を映す「鏡」

- **「与える・教える」ではなく、「共に苦しみながら考え続けること」「共感」ではなく「共苦」**
- **支援とは相手を変えることではなく自分を変えること。**
- **「人は変わる」「今のままを愛する」という忍耐**
  あなたは変われますか？
- **成功を求めない**
  そのままのあなたを愛する
- **失敗する権利**
  失敗を共に受け入れて苦しむ覚悟と勇気
- **「声なき声」を聴く**
  暴力、涙、笑顔、目線、しぐさ、行動、沈黙が何かを表現している
- **沈黙の力**
  何も言わずに付き合ってくれてサンキュー♬
- **存在自体が人間の目的**
  意味ではなく存在。あなたがここにいること自体が素晴らしい。
- **「対等」を超え、相手を見上げる視線**
  他者の人生を想像する

支援とは何か？　まとめ２

問い）あなたは支援者です。末期がん患者を担当しています。患者があなたにこう言いました。
「私はもうだめなのでしょうか？」あなたはこの患者にどう答えますか？

①「そんなこと言わないで、もっと頑張りなさいよ」
励まし（意図的な否認）支援者側の「前向きであれ」と言う価値観の押し付け
精神科医以外のすべての医師、医学生

②「そんなこと心配しないでいいんですよ」
安心させようとするが、根拠なく現実を否定

③「どうしてそんな気持ちになるの？」
一見共感的だが、説明を求めることで話を感情から理屈へ移動させる。因果応報的
看護師と看護学生

④「これだけ痛みがあると、そんな気にもなるね」
状況に基づいた共感。痛みに焦点を当てることで、身体的苦しみに寄り添う

⑤「もうだめなんだ・・・とそんな気がするんですね」
気持ちをそのまま反復・受容する。判断せず、修正せず、ただ共に在る姿勢　**沈黙の力**
精神科医

ターミナルケアをめぐるアンケート（柏木哲夫・岡安大仁）末期医療研究者
調査対象：医学生、看護学生、内科医、外科医、ガン専門医、精神科医、看護師
結果：精神科医以外のすべての医師、医学生が①
　　看護師と看護学生③
　　精神科医⑤
出典　「聴くことの力」臨床哲学試論　鷲田清一

総括　これが世界における支援。

- 善意から生まれる押し付け。「善」とは何か？
- 支援とは相手を変えることではなく自分を変えること
- 支援とは永遠のプロセス。結果はあなたの外側にある
- 沈黙の力
- 障害者とは「人間を愛すること」を教えてくれる教師

問い続ける営み....

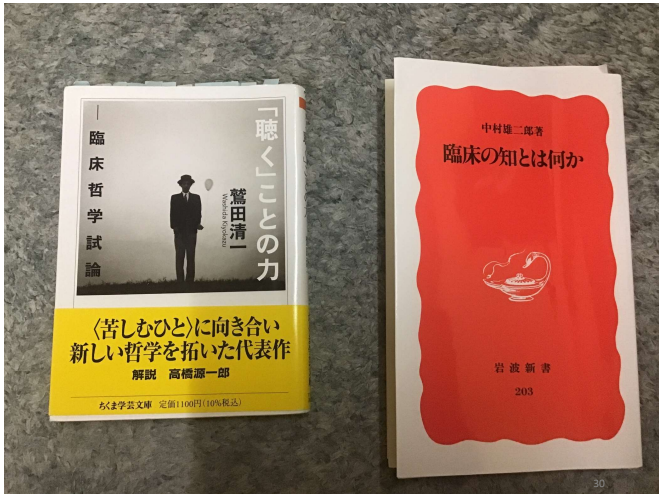
私たちの喜びとは誰のためのものなのか？
役に立てた自分？それとも **共に生きる喜び**？

たった一羽の蝶がこの地球の全重量を支えている

私が障害のある人たちに感じる想いを端的に表す言葉です。
一羽の蝶は本当に小さな存在です。風が吹けば翻弄され、いつも迷いながら空を舞い、誰も気に留めない。
しかし、このもっとも小さく、社会から弾かれる存在こそが、この地球の全重量を支えてくれている。
私にとってたった一羽の蝶と障害のある人が重なって見える瞬間の光景です。

私たちは時に、大きな存在、強い存在に憧れ、そんな自分になりたいと望みます。
それは、「私の存在」そのものよりも、「私の意味」が重要だと考えると言ってよいでしょう。
しかし、一羽の蝶は「私の意味」よりも「私という存在自体」が大切なのだと教えてくれるのです。

そして何よりも大切なことは、この考え方は障害のある人だけに言えることではなく、すべての命あるものに拡大可能だということです。
どんなにひどい目に遭ったとしても、とても大切だと感じたとしても、命とは「存在自体に意味がある」
そのように考える時、私たちが生きる場は、輝きを取り戻し、私たち自身も輝くでしょう。

この蝶が私に見せてくれた風景は、福祉という営みの中で、障害のある人たちから私が教わったものです。
私はこの風景を、皆さんにも見てほしいと、心から願っています。

参考文献